

脇山 咲

Teens KARATSU ♠ E班



七山のたくさんの魅力

七山ななさんは唐津市の東部にある、自然豊かな町です。七山にはたくさんの魅力があります。鳴神なるかみの庄では、地元の新鮮でおいしい野菜が生産者の名前入りで売られています。その近くにある鳴神公園は、水を求めて遠くから来る人がたくさんいます。

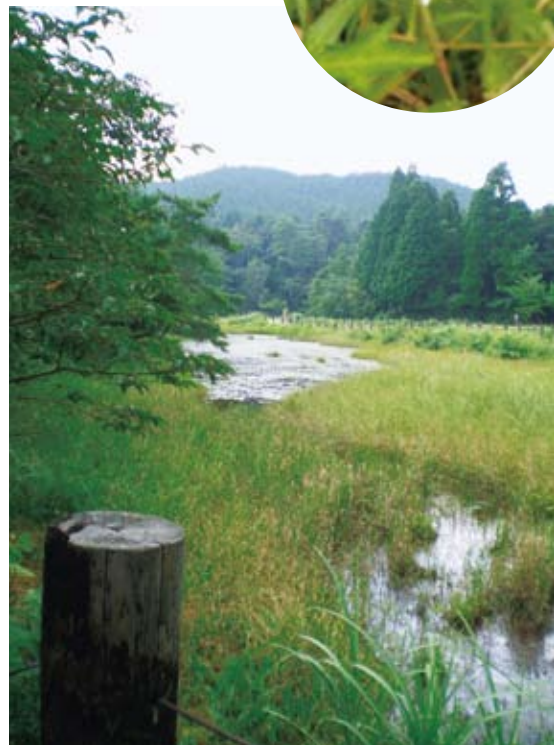
温泉交流施設「ななのゆ」では、七山の景色を眺めながら温泉に入ることができ、七山の食材を使ったおいしい料理も楽しめます。また「ななのゆ」では、木材をチップ状に碎き、チップボイラーで燃やし、燃やした時の熱を温水として取り出して施設内にある大

浴場等の給湯に利用するという取り組みを進めています。これは、佐賀県の温泉施設では初の試みで、今後注目されるエネルギー利用のひとつです。「なのゆ」では、二酸化炭素の排出を防ぐためにも、七山の木材をチップにして利用していく活動をしていきたいそうです。

他に背振山西部に檜原湿原という湿地帯があります。ここには、湿原にしかない希少な動植物が多く生息しています。特に RDB（絶滅危機に瀕している種）となっている動植物もいるので、檜原湿原は保全・再生・維持管理に力を入れています。しかし近年、環境のバランスが崩れ、一部陸地化してきていることが問題となっていました。原因のひとつに湿地帯に手を入れることができないということがあるそうです。これにどう対処するか、今後の湿原の生態系に大きくかわって



檜原湿原に咲くサギソウ。
市町村合併前の村花だった



希少な動植物が生息する檜原湿原



鳴神公園の中の自然の川で水遊びをする人たち

くると思います。またNPOやNGOなどの自然再生協議会があり、自然再生事業が実施されています。

地域の人びとが中心のイベント

七山では観光の他にたくさんのお客様があります。毎年5月下旬に開催されているニジマス釣り大会では、ニ

ジマス7000匹が放流されて、多くの人たちが参加しています。七山ふるさとまつりは、「鳴神の庄感謝祭」などの企画が盛りだくさんのイベントで

す。他にも「国際溪流滝登り」なやま」が毎年7月下旬の日曜日に行われています。外国から来る人もたくさんいて、自然を楽しく実感できるイベントとして人気を集めています。

自然エネルギー活用と特産品開発

七山には大きな川があり、水資源がとても豊かです。そこで私はこの水を使ってエネルギーを生み出すことができないだろうかと考え、水車に注目しました。水車のエネルギーをなにもに利用しようかと思い、「小麦について、

その小麦粉でパンをつくるパン工房をつくって、地域の人や都会の人たちに食べてもらう」という考えを思いつきました。

パンの焼き方にも工夫があります。「なのゆ」のチップボイラーの応用で、間伐材を使った燃料チップを石釜で燃やし、その熱を使って焼くという方法です。

ここでは、パンを食べてもらうだけではなく、実際に自分でパンを作って食べたり、小麦についている様子を見学することができます。「七山のふれあいパン工房」として、七山の活性化につながる新しい施設になるとよいと思います。

さらに、クッキーやケーキなどのス

イーツや、七山の特産品であるミカンを使ったジャム、その他にも七山茶を使った「お茶パン」や相知おうちでとれるそば粉を使った「そばパン」などさま

さまざまな種類や味を楽しんでもらうということを考えています。また、季節ごとに味を少し変えてみたり、その季節に採れる旬の野菜を使つたスイーツなどを作つてみたい。観光や遊びに来る人たちに七山のことをもっと知ってもらうために、七山の特産品を使つたパンやスイーツを味わってもらいたいと思います。

このような新しい施設を増やして、七山に人がたくさん集まるような、にぎやかで楽しい町にしていきたいと思っています。



温泉交流施設「なのゆ」
の燃料用木質チップ



木質チップを燃料とする石窯のイメージ図



「七山のふれあいパン工房」のオリジナル商品（イラスト／脇山咲）

丸一日、七山の木で遊ぶ

山口麗菜

Teens KARATSU ♠ E班



七山の現状

七山では今、過疎化という大きな問題を抱えています。昔は約4000人の人が住んでいた村ですが、今では約2400人となり、お年寄りのひとり暮らしが増え、畑の手入れなどがきちんとできなくなっているところが増えています。今では401世帯が農業をやっていますが、専業で農業を営んでいるのは94世帯しかありません。また、七山には約4200ヘクタールの山がありますが、過疎化のための後継者がおらず、すべての山に手入れが行き届いていないそうです。そのため、団体や組合で協力し、まとまって一つひとつの山の手入れをやっています。なぜ山の手入れをしないとイケないかというと、山は手入れをしないと崩れてしまうからです。

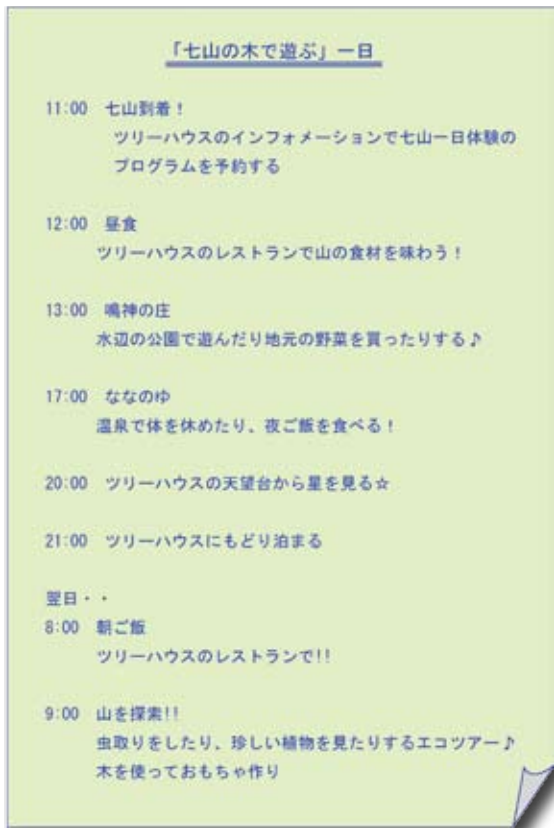
過疎化を止める対策

七山では、過疎化を少しでも減らそうとさまざまな活動が行われています。そもそも過疎化が進む原因は、地元の仕事がないこと、住む場所がないことです。

林業はとても重労働で、やりたいと思う人がほとんどいません。そのため対策として、共同住宅を建てたり、都会の人が田舎に帰った気分を味わうことのできる観光農園の「おいでな菜園」などがつくられ、住む場所や、観光客がたくさん訪れる場所があります。

七山に訪れる人たち

七山にある温泉交流施設「なのゆ」は過疎地域の活性化のため、年間10万人の利用者を目標としてつくられましたが、オープン後は目標を超える倍の



「七山の木と遊ぶ」一日のスケジュール



鳴神（なるかみ）公園を流れる玉島川で遊ぶ子どもたち



インフォメーション・センターを備えたツリーハウス
(イラスト/山口麗菜)



都会の人が訪れる「おいでな菜園」



地元の新鮮な野菜が並べられている「鳴神の庄」

売り上げとなり、昨年は26万人もの人が利用しました。また、訪れる人の6割が福岡ナンバーで、やはり自然を求めて、健康のために都市部から来る人が多いようです。

「なのゆ」は平日1日400人、土曜日は600人、日曜日は1000人もの人が利用しているそうです。この「なのゆ」は、アルカリ成分が多く含まれており、ぬるぬるとした感じがします。それが肌にはとてもよく、美肌効果があるそうです。

七山には玉島川や滝川川があり、地元の人や都市の人も多くの方が遊んでいます。とてもきれいな川なのですが、地元の人たちの清掃活動などにより保たれています。また、観光客が農村体験を楽しんだりできるイベントが行われています。

「七山の木と遊ぶ」1日スケジュール

こんな七山の魅力をもっと楽しむために、私は新しい七山の過ごし方を提案したいと思います。

午前中、都会から七山に着いた人は、まず七山の中心にあるインフォメーション・センターに行きます。そこで、七山1日体験プログラムを予約します。このインフォメーション・センターは、七山の木でつくったツリーハウスでできたらいいと思います。そのあと、山の食材を味わえるツリーハウスのレストランで昼食を食べます。午後は、水辺の公園で遊んだり、地元の野菜を買ったりした後、「なのゆ」の温泉に入ってから夕食を食べます。夜は、ツリーハウスにつくった天望台から星を見ます。もちろん泊まるのもツ

リーハウスです。翌朝、虫採りをしたり珍しい植物を見たりするエコツアーに参加したり、木を使ったおもちゃづくりをしたいと思っています。

七山では、木を植えるキャンペーン活動などは行われていますが、木に触れて「遊ぶ」ことができたらいなと思います。そこで、木のおもちゃをつくる体験ができたり、木から木に渡る遊びがあると、地元の子どもも集まってきたり、観光客も増えると思います。そして、七山にもっと花を増やしたいです。七山の木でつくった水車に花を植えて、花水車をつくってみたいです。このように、1日を通して七山の自然を楽しんでもらいたいです。

自然と遊んで楽しむものと、自然を見て楽しむものをもっと増やしていつか、地元の人が地元で働ける場も増やせたらいいと思います。

日本一の棚田を キャラで進“食”

宇治川深雪

Teens KARATSU◆E班



棚田とは？

棚田は、山の傾斜地に棚のようにつくられた田んぼのことで、段々畑のようなものです。しかし、段々畑と違って、棚田は田んぼなので水を張ります。水がもれないよう水平にしなければなりませんし、石積みから水がもれないようにしなければなりません。

石積みと石積みの上の田んぼは素敵です。私は全国にある棚田のうち、石積の高さが日本一の「蔵野の棚田」に注目しました。

蔵野の棚田の問題

そんな蔵野の棚田には、今さまざま



高さが日本一の棚田の石積み



棚田米で作ったおにぎり

な問題があります。ひとつは、高齢化です。全国の棚田も同じですが、棚田には特に労働力がふつうの田んぼよりも必要なのでとても大変なのです。その理由は、蔵野の棚田は道がせまく、坂が急なことにあります。なので、大型の機械は棚田に入れません。ほとんどが手作業になり、労働力がとてもいるそうです。このため、田んぼの地主さんと、隣り合う田んぼの地主さんとが協同して農作業を行うこともあります。しかし、それでもあの大きな棚田を手作業するとなると、とても大変だと思いました。

それだけでなくさんの労力がかかる棚田米の収穫量は、ふつうの田んぼの量の半分しかないそうです。台風や大雨によって石積みが壊れることもあります。壊れてしまった時は、今ある棚田の山、八幡岳が噴火した当時の溶岩を使って直します。その溶岩が今なくなろうとしていて、もしなくなってしまうたら、コンクリートを使うかもしれないということです。でも私は、コ

ンクリートよりやつぱり自然の石積みの方がいいと思います。他にも、イノシシが田んぼを荒らすなど問題はたくさんあるそうです。イノシシに関しては、電気の柵で防いでいますが、大きくて賢いイノシシは、その柵さえも跳んでよけるかもしれないということでした。

蔵野の棚田の未来

蔵野の棚田には問題もたくさんありますが、いいところやすごいところもたくさんあります。

まず、田んぼ一つひとつがダム役割をしているということです。大雨が降っても上の田んぼがいったん水をせき止めてくれるので、下にある集落へ直接流れることはありません。棚田には水を貯める機能があり、水量の調節をして氾濫を防ぐ役割があるのです。さらに江戸初期頃からの歴史もあるそうです。

そしてなんといっても景観がすごい。とにかくすごいと、蔵野の棚田に

ないでしようか。

私がデザインしたのは、棚田にいたヤギと棚田米の「たなたん」というお米のキャラクターと石積み模様をモチーフにした帽子です。帽子だとかぶるだけで宣伝にもなるし、かなりかわいいと思うので、たくさんの人にイベントなどでかぶってもらうことができます。この帽子を見て興味をもった若者が棚田に来てくれるかもしれません。若者が実際に棚田に来て、棚田米を買っていったら、友だちや親せきなどに紹介すると、またその人たちが棚田にやって来るという連鎖が続いていけば、蔵野の棚田は盛り上がり、20年後も残ると思います。そんな風になってほしいと思うし、このきれいな風景は絶対残っていてほしいと思います。これが私の期待する20年後です。

来た人と地元の人はいいます。私も実際に見て「すごいっ！」と思いました。見るどころすべてが緑できれいでした。またすきまから見える石積みもきれいに積んであるので、まったくあきない風景です。風が吹くと稲がゆれてとてもきれいで、これはいつまでも残ってほしいと思いました。

「たなたんやぎ」キャラクター

蔵野の棚田はとてすばらしいところですが、20年後こないところ



いつまで見てもあきない蔵野の棚田の風景



棚田・石積み・米・ヤギをモチーフにしたPR帽子
(イラスト/宇治川深雪)

化粧品ブランド「山守」を世界へ

吉岡美湖

Teens KARATSU ♠ E班



森林管理の現状

下右の写真は巖木地区の1975年の航空写真です。赤い線で囲ったところはミカン畑になっていました。最近ミカンの木がすっかりなくなつてしまい、ふつうの森林や山へと変化しています。また、この森林は管理が進んでいないため、下左の写真のように木の先端が丸くなっています。この原因として考えられるのが間伐をしていないということです。

間伐というのは、木が生長し、ぶつかり合った時に、そのままだと地面が木の陰になったり、低い木が他の木に覆われて育たなくなるのを防ぐため、

間にある木を伐ることを言います。しかし、間伐をするのには労力が必要ですし、それ以前にお金がかかるというのが問題です。

化粧品「山守」の開発

この状況を打開すべく私が考えたの



2006年の巖木地区の山々。木の先端が丸くなっている



1975年に撮影した巖木地区の航空写真

が、間伐材を利用して何かできないかということでした。そして私が思いついたのが、化粧品「山守」^{やまもり}。これは「山を守る」という意味でつけられた名前です。山の管理者の呼び名でもあります。「間伐材だなんて使いたくない」という人もいるかもしれませんが、間伐材だからよいこともあります。

具体的に私が考えているのは、間伐材の主になる桧や杉から得られるエキスを使用し、100%天然のハンドクリームや美容液をつくり、そこから発展させシャンプーや石鹸、歯みがき粉などをつくってあげればと思っています。いずれはそれを世界へと発信します。「唐津はフェイマス・フォー・ヤマモリとなる」というのはあくまで私の夢ですが、それを現実のものとするのは私たち次第ではないでしょうか。

しかし、これくらいなら他の地域でもできるでしょう。私はさらにこの化粧品に佐用姫の湯の成分を加え、美肌のための地域特有の化粧品をつくらう

と思っています。間伐材は管理の進んでいない山の所有者と話し合い、よい反響があつたなら一石二鳥、とてもよい案だと思いませんか。

「最先端のまち唐津」へ

この化粧品は社長が唐津出身の化粧品会社DHCと共同で生産できれば、日本中に広めることも夢ではありません。さらに世界中に商品を広めることができます、とてもよい結果が生まれるに違いありません。

私が海外にこれを広める方法として



木と温泉の湯をイメージした「山守」のブランドマーク。手入れの行き届いた木をモチーフにした

唐津を活かす「最先端」の発想

今まで私の考える間伐材の利用方法、化粧品について紹介しましたが、他に例をあげると、間伐材で家をつくったり、子どものおもちゃをつくったり、もしくは美術のための彫刻の原料としても利用可能です。このように間伐材は、とても有効に活用でき、今までとは違う新しい発見もあると思います。

ここで私が勘違いをしてもらいたくないのが、「最先端」の意味です。これは唐津の町を、ビルが建ち並ぶ、パソコンやタッチ操作の携帯電話の普及したような都市にすることではないのです。あくまで技術や考え方、もっと言うならば発想が最先端ということ

です。私たちの暮らす唐津市は大きな遊園地もなければ、高層ビルの集まった場所もありません。本場に大切なのは、そうした建物や施設があることなのでしょうか。

私の考える「最先端」とは化学薬品などを使わず、天然素材を活かすことのできる技術です。自然あふれる唐津の町。その自然を活かした商品で町おこしを、間伐材を有効利用した化粧品というかたちで20年後の唐津に活かすことは可能なのではないでしょうか。



手入れのよい木は先端が尖っている（右）。手入れを怠ると先端は丸くなる（左）



美容液



ハンドクリーム



石けん

(イラスト/吉岡美湖)

天川お米プリン

材料

お米 150cc
卵黄 2個
グラニュー糖 大さじ6
牛乳 50cc
バニラエッセンス 少々
砂糖 大さじ3
氷 大さじ2

作り方

- お米とバニラエッセンスを混ぜる。
- 1に卵黄と牛乳を混ぜる。
- 器の7分目まで生地を入れ、蒸す。
- 蒸すとき、湯気があがったら、お米を混ぜる。
- カラメルを作る。カラメルは、お米の上に流して、冷たくしてから冷やす。
- できあがり!!

他に作り方はたくさんあります!!
ためしてみよう!!

「天川プリン」の作り方



トをつくってみました。

① **天山恋愛パワースポット**

天山は、標高1046メートル。佐賀県の中央部にそびえる山で、山頂からは遠く阿蘇山まで広大な景色を見ることが出来ます。山頂には、霊的なパワーがあるとされています。そこで、まず山頂に眺望が楽しめる展望テラスと縁結び神社を建てます。また、山頂までの道のりのどこかに、天川で有名なシャクナゲをハート型に植えたスペースを設置し、それを探し出すことができれば恋が叶うという伝説をつくりたいと思います。

② **佐用姫の湯**

これは厳木地区にある温泉で、美肌によいとされるアルカリ性の湯なので、特に女性の方に人気です。お肌ツルツルで素敵な恋人がゲットできるかも、という期待感が高まります。

③ **天川お米プリンと米ストラップ**

天川の棚田でつくられた「天川」というブランド米と、厳木の湧き水「佐用の水」を使った珍しいプリンの開発を提案します。このプリンには、おみくじ占いがついていて、「大吉」や「中吉」などの字とともに、「天山神社に行けば、金運がアップ!」などという言葉もついていて、自然と人を天川にとめるようになります。美味しいことは、間違いありません。米ストラップは、色のついた細かな砂と、町の農家の方が一所懸命つくった「天川米」を一粒ビンに入れた、思いのこもったストラップです。

このように、女性にうれしいスポットやグッズが多いこのルートを私は「乙女ロード」と名づけたと思っています。天山はカップルにも向いています。ひとりでも、ふたりでも楽しめるスポットにしたいと思います。

天川幸せめぐり 乙女ロードの提案

本庄 望

Teens KARATSU ♠ E班



の割合が50%以上の集落を言います。限界集落になると、さまざまな問題が起こります。

例えば、若い人がいなくなり、後継ぎがいなくなるということがあります。後継者のいなくなった田畑は荒れ、作物が育ちません。山林も間伐が行われないため、森に光が入らず、土が固くなり、水を吸収しなくなると、大雨などの時の土砂災害の原因にもなり、町に大きな被害が起きます。このように町全体に悪い影響がでてしまうので、後継ぎが減少しないようにしなければなりません。

後継者をつくるにはまず、集落へ人を呼び寄せ、農業や産業に興味をもつ

てもらうことが大切です。特に、若い女性に来てもらうことができれば、集落に活気が生まれます。最終的に天川に移住する人が増えれば、後継者不足の解決につながると思います。

そこで、雄大な自然と食の魅力にあふれた「天川」を散策して、町の素晴らしいさを体感してみようことを考えてみました。

天川の幸せめぐりルート

天川には、さまざまな名所があり、歩いてとても楽しめる場所です。そして、20年後も、私が残っていてほしいと思う名所を含め、天川に行くと若い女性が幸せになれるという理想のルー

天川の魅力

天川は唐津の厳木地区にある、自然にあふれた魅力的な町です。小さな町ですが、天川産極上コシヒカリ「天川」という棚田米や、県立自然公園に指定された「天山」などもあります。

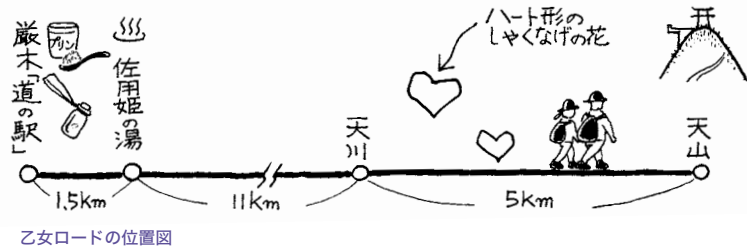
さらに、山並みに沿って行くと、「厳木ダム」もあり、発電や災害などの時のための町の大切な貯水湖にもなっています。

天川の問題

天川の深刻な問題は、「限界集落」になりつつあるということです。限界集落とは、65歳以上の人の人口



天川産コシヒカリを生産する「棚田」





高良登志美さん ● 榎原湿原を守る会会長
暑い中、私たちのために絶滅しそうな生物や珍しい生物を、とてもていねいに教えてくれました。



北島正信さん
● 鳴神温泉「ななのゆ」支配人
「ななのゆ」に来られるお客さんのこと、そして「ななのゆ」をつくられた理由など、たくさんのがわかりました。チップボイラーのことも今までぜんぜん知らなかったので詳しくお話が聞けてよかったです。



百武兵衛さん ● 蕨野区区长
おそばがすごくおいしかったです。そば湯をそばのつゆに入れて飲むというのは初めてだったのですが、今度家でも試そうと思います。棚田米もおいしかったです。いつかお金をためて1袋買いたいです！



川原増雄さん ● 蕨野区前区长
棚田の詳しい話をしてもらいました。おかげで思っていたより大変だったということ、やっぱり蕨野の棚田はすごいということを実感しました。



中島峰広さん
● 早稲田大学名誉教授・棚田学会会長・NPO法人棚田ネットワーク代表
先生とお会いできたのはものすごく運がよかったと思います。日本一の棚田がある唐津を、これからも応援していただけないでしょうか。石積みの話はとても勉強になりました！

重大！

どう活かす、10代の提案

唐津市へのQ&A

今回の本づくりでは、都市計画マスタープラン（以下、都市マス）作成に携わった唐津市都市計画課の職員が企画段階から加わり、都市マスの説明や、中高生が行うインタビューの同行まで、ワークショップの全プロセスをサポートしました。彼らにとって中高生とともに過ごした1週間はどのような意味があったのでしょうか、これからの唐津市のまちづくりに変化はあるのでしょうか。

ワークショップを終えて、あらためて都市マスについて考えたこと、中高生の提案をどのように受け止めた、どう活かしたいと考えているかといったことについて、唐津市の竹内克志さん（唐津市建設部長）、中江勉さん（都市計画課副課長）、隅田憲宏さん（都市計画課計画係）にお話をいただきました。



1週間のプロジェクトを終えて

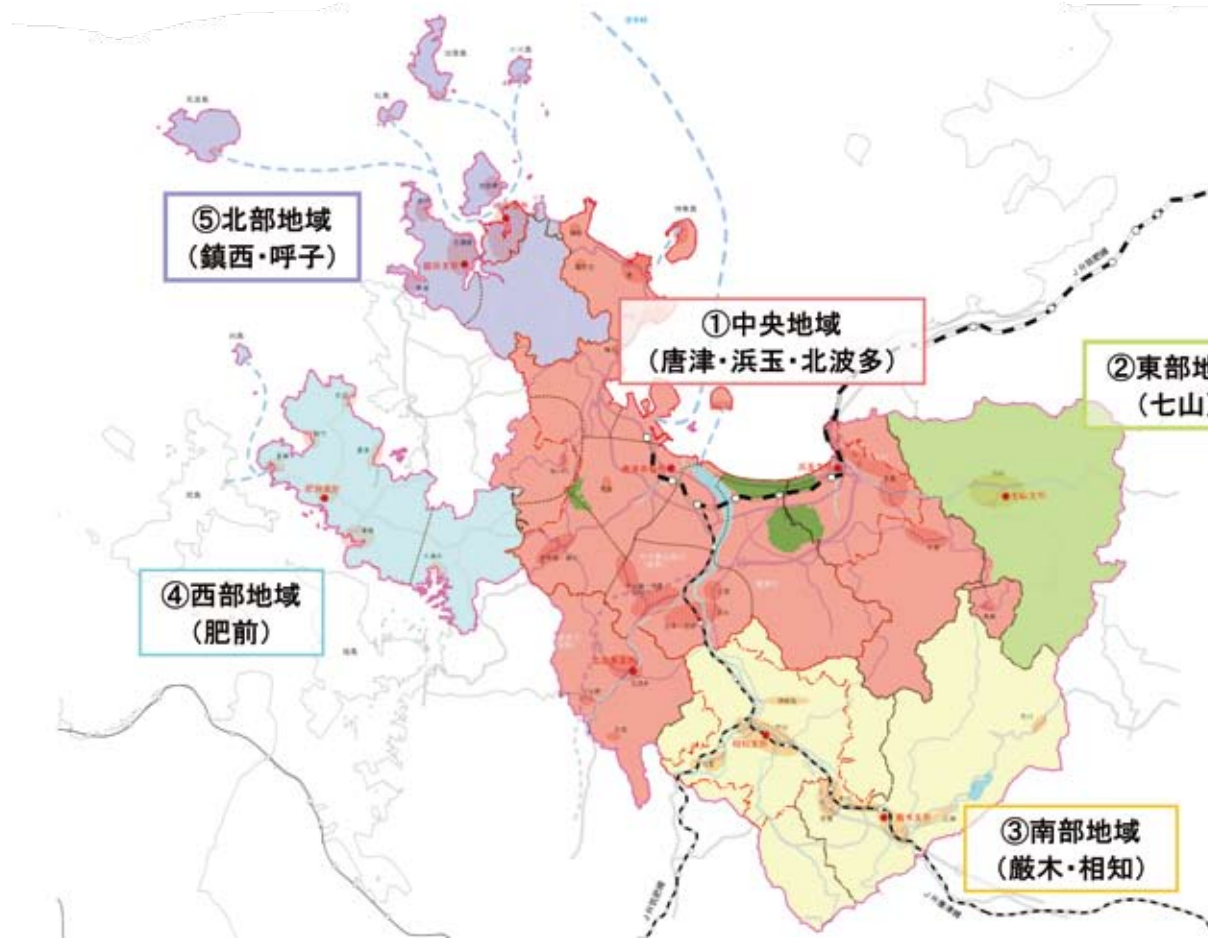
Q 1週間、中高生とかかわりどんなことを感じられましたか？

隅田 ◎これまで中高生を相手に都市計画について話すことがなかったので非常に熱くなっていました。誰かに

なにかを伝えたいという気持ちが強くあったのですが、それがこのプロジェクトで実現できたことがなによりうれしかったです。

中江 ◎子どもたちが地域の方々に質問することで、住民の方から「生の声」が出てきたのがとても印象的でした。これまでも計画をつくる過程で「市民の意見を聞いた」と思っていました。今回のプロジェクトを通して「本当に聞いていたのか」とあらためて考えさせられました。大人同士では、しがらみがあって知らず知らずに発言にブレーキがかかったり、行政相手に言ってもどうせ聞いてくれないと思われるので、生の声は届きにくい。でも、子どもからの率直な質問には、皆さんとても丁寧な真剣に話をしてくれました。また、都市計画の仕事をしていても、実際に現場に出かけていって地域の人の生の声を聞くことは少なく、こ

地域区分図



地域別のまちづくりの目標	
地域名	まちづくりの目標
中央地域 (唐津・浜玉・北波多)	唐津市の要として情熱ある市民活動とともに市全体の活力をけん引する地域づくり
東部地域 (七山)	清流、温泉、檜原湿原などの資源を活かした都市・農山村交流の山里づくり
南部地域 (厳木・相知)	松浦川・厳木川を中心とした多彩な地域資源と高速交通体系を活かした産業との調和による水と緑の郷づくり
西部地域 (肥前)	いろは島、大浦の棚田、鷹島肥前大橋などの海と里の資源を活かした都市・農漁村交流の郷づくり
北部地域 (鎮西・呼子)	玄海の食や大陸との交流の歴史・文化資源の活用による国際観光・交流の地域づくり

という仕事こそ本来の都市計画の仕事なのではと感じました。

竹内◎都市マスの説明でも、重要な方針は特に力を入れて説明したつもりですが、子どもたちがそこを十分受け止めて、あらためて浮かび上がらせてくれたことに感謝しています。計画づくりは、ともすると役所の中で閉じてしまいうことが多いのですが、今回のプロジェクトは、計画づくりを市民に開く

契機になりました。市民協働のヒントを与えてくれたと思います。中高校生は、地域の元氣を取り戻す「元氣のふりかけ」ですね！

唐津市都市計画マスタープランとこの本の関係

唐津市の都市マスの特徴はどういったところにあるのでしょうか？その特徴は、この本の中でも活かされているのでしょうか。

竹内◎都市マスは、都市計画区域を対象に、まちづくりの方針を定めるものです。唐津市では、唐津、相知、呼子の3つの都市計画区域が指定されていて、これは市全体の約36%の面積にあたります。しかし、唐津市は2005年および2006年に9つの市町村が合併したという経緯を踏まえ、都市マスの対象を都市計画区域外も含めた新市域全域とし、20年後の唐津市の将来像とまちづくりの方針をまとめました。都市マスに描かれたまちづくりの方針は、これからの市の予算をどういった事業に使うか決めるうえで参考にするとても重要なものです。

ここでは、合併後の新しい唐津市の総合計画で掲げたまちづくりの基本理念「響創のまちづくり“元氣が出る新唐津く海・山・川の響きあい新市の魅力を輝かせ、新しい活力を創る”」にもとづき、「観光交流まちづくり」、「水と緑の景観まちづくり」、「市民協働のまちづくり」という3つの先導的まちづくり構想を定めています。さら

に、地域の特性にあわせ、5つの地域別（中央、東部、南部、西部、北部）のまちづくりの目標を定めています。（右図参照）

対象が市全域にわたっているというのが唐津市の都市マスの特徴となっているわけですが、この本でも、「まちなか（中央）」、「みなと（中央）」、「虹の松原（中央）」、「海のまち（北部、西部）」、「山里（東部、南部）」の5つの地区ごとに、中高生が地区の現状の課題と都市マスで示されている方針を踏まえて、提案を行っています。

都市マスとは都市の目に見えるかたち（ハード）の方針を示す計画ですが、この本で、中高生はハードのまちづくりとは直接関係しない福祉や教育、新たな地域プランドづくりなどのソフトの提案をしています。これについてはどう考えていますか？

竹内◎私は離島の医療問題を、子どもたちがきちんと受け止めて書いてくれたことに感動しました。本来ソフトとハードは切り離すことができないものだと思います。この本で都市マスでは描ききれなかったソフトの問題を子どもたちが課題として受け止め、具体的な提案につなげてくれたことは、都市計画の本来のあり方を指し示していると思いました。

都市マス自体がこの本によって変わる可能性はありますか？

中江◎すでに書かれている都市マスの本文を変えることは考えていませんが、本編の中に今回の中高生の提案などもコラムという形で挿入してみたらどうかと考えています。中高生のコラムが入ることによって、都市マスで目指す将来像のイメージが広がるのではないのでしょうか。

都市マスには概要版もつくと聞いている。この本の位置づけはどうなりますか。どのように使ってほしいと考えていますか？

中江◎この本は、書店だけではなく、図書館や公民館など一般の人びとが目に触れるところにぜひ置きたいと考えています。できれば都市マスの本編や概要版と一緒に副読本としてこの本を読んでもらいたい。この本を読むことによって、都市マスに興味をもつ人がでればうれしいですね。マスタープランを絵に描いた餅にしないために、5地域の説明会に子どもたちも参加してもらい、できることから地域の人と一緒にまちづくりをはじめたいと思っています。

竹内◎もちろん庁内でも都市マスの本編と一緒に本を配布しますが、配布する時には、庁内関係部署に中高生の提案のうちひとつでも実現してほしいと声をかけるつもりです。

中高生の提案を実現するために

中高生の提案の中で、もっとも実現したいと思う提案を教えてください

さい。

隅田◎白いあんこの松露まんじゅう（↓50 p）。これは面白いのでぜひ実現したいですね。バスセンターに講師つきの自習室を置くという提案（↓12 p）は、まちなかの空き店舗でもできると思いますし、講師についても大学交流連携センターなどに相談したり、退職した先生などに声をかければ実現できるのではないでしようか。

呼子の朝市の商品を多様化するというアイデア（↓56 p）もイケますね。来訪者の高齢化が進む呼子にさまざまな年代の人たちに来てもらうためには必要なことと思います。

中江◎まちなかの提案内容は都市マスともリンクしていて実現性が高いと思います。虹の松原グループの文章は、とても幅広く調査してあって、読み物としても面白かったです。虹の松原についてはよく知っているつもりですがそれでも新たな発見がありました。吉岡さんの「山守」というブランド名をつけて間伐材を活かしたらというアイデア（↓78 p）は、インタビュールした蔵木支所の竹蔵さん（ちくざん）もきつと喜んでくれると思います。

竹内◎森田君の「におう唐津」（↓20 p）がよかったです。唐津街道の雰囲気は今も残る古い町並みを「におう」と表現したことに感動しました。このあたりは「どやんかせんといかん」と思っていたところですが、「におう」を大事にして今後を考えていきたいと思います。本庄さんの天川乙女ロードも実現し

くるのもアイデアとしてあるかもしれません。

Q 今回の本では、中高生が20年後に
なっていてほしい唐津の将来の姿
を描いてくれました。20年後の唐
津の将来についてどのように考え
ていますか？

竹内◎一番心配していることは市の台
所事情、財政問題です。限られた予算
の中で、どうしたら市の事業を効果的
に行うことができるのか頭を悩ませて
います。行政が単独でまちづくりを行
うのではなく、市民にも役割を担って
もらうためには、市民協働というかた
ちをうまくつくっていくことが不可欠
だと思っています。今回のプロジェクト
を実施することで、中高生のまちづ
くりへの参加の可能性を実感すること
ができましたし、地域の人びとがまち
づくりに参加するためのヒントとし
て、これまでのまちづくりの提案制度
を広げたり、中高生と地域の人びとを
つなげるこの大切さなどを発見しま
した。今回のような試みをきっかけに
して、唐津市らしい「市民協働」のか
たちをみつけていきたいですね。

参加した中高生へのメッセージ

Q 今回参加した27名の中高生にメッ
セージをひと言いただけますか？

竹内◎20年後まで唐津に住んで、君た
ちの提案がどこまで実現したか、見届

てみたいアイデア（↓80 p）です。本庄さんは、米布林などいろいろな提案をしてくれましたが、地元の人たちに話して、そのなかのひとつでも実現していきたいと思っています。

発電所を産業遺産として残していこうというアイデア（↓32 p）は私たちもつっていたので、とても興味深く読みました。

Q 中高生の提案を実現していくため
にどんな方法を考えていますか？

竹内◎今回の中高生の提案を地域に返
していくこと、これをまずやっていき
たいと考えています。これらの提案の
中で、地域の人々がぜひこのアイデア
を実現したい、という話があれば、行
政が絶対バックアップしていかなけれ
ばならない。

中江◎実は、すでに唐津市のまちづく
り会社「いきいき唐津」から、イベン
トの中でまちなかグループに提案を発
表してほしいという依頼もきていま
す。もちろん、まちなかに限らず、中
高生が市内各地のまちづくりでコラボ
レーションする可能性はあります。本
ができたらず、取材のお礼を兼ねて
中高生と一緒に地域で発表会をしたい
と思っています。

今後のまちづくりについて 思うこと

Q 都市マスが目標年次としている20
年後、唐津市を支える中心となる
のは今回参加してくれた中高生の

けてね。一緒にやれることは一緒に
やっていきましょう！これからいろいろ
な機会で唐津のまちを考えてくだ
さい。

中江◎これで終わりじゃありません！
提案したことを忘れないでほしいと思
います。それからぜひ役所に顔をだし
てください。

隅田◎20年後に飲み会をしましょう！
20年後、私は57歳でまだ役所で働いて
いるはずですよ。



インタビューの風景。2010年10月5日早稲田大学にて

年代です。今回のプロジェクトを
通して、これからの計画づくりに
ついて感じたことは？

竹内◎都市マスづくりにかわった多
くの人、20年後にはリタイアしてい
る年齢の人です。20年後の将来を担う
人を計画づくりに参加してもらうべき
なのではないかといった発想自体、正
直あまりなかった。でも、今回のプロ
ジェクトで、将来を担う、若い人たち
の視点が重要だということを、あらた
めて考えさせられました。今後は都市
マスに限らず、計画づくりに、将来の
まちづくりの主役となる若い人たちの
視点を入れていく必要があると痛感し
ました。

Q 中高生にまちづくりに参加しても
らうためにどのような方法がある
と思いますか？

竹内◎学んだ市民を育てるためにも、
中高生のまちづくりに参加は今後の大切
なテーマとなると思います。中高生を
育てるには、中高生が提案したまちづ
くり活動を見守り、サポートしてくれ
る地域の市民団体、NPOの存在が欠
かせません。中高生と地域の人びと
がともにまちづくり活動を行うこと
で、地域の人びとも学ぶことがあるの
では。こうした学びあいの仕組みをつ
くっていければいいですね。

中江◎現在唐津市では、市民のまちづ
くり活動に対して助成する制度があり
ますが、この制度を広げて、中高生た
ちの提案を実施する助成制度などをつ

◎インタビューを終えて

この本づくりは、20年後の唐津市の
将来像を示す都市マスを中高生にでも
わかるように伝えたい、という坂井唐
津市長の想いが発端となってスタート
しました。

しかし、実際にできた本は、翻訳と
いう枠を大きく超えたものとなりました。
た。中高生は、都市マスに描かれてい
る言葉をただ受け止めるだけではなく、
く、その中に可能性を見出し、ふく
らませ、それを提案というかたちで色
鮮やかに描きだしました。彼らは、地
域の人びとの生の声をそのみずみずし
い感性で受け止めることによって、想
像を広げ、都市マスに描かれた言葉に
生気を吹き込んでくれたのです。その
結果、都市マスの翻訳ではなく超訳、
都市マスから大きく「跳躍」した本が
できあがりました。

中高生がこのような反応を示したと
いうこと自体、現在の都市マスのあり
方そのものに大きな示唆を与えている
のではないでしようか。

『10代が描く唐津のみらい』の本づ
くりは、都市マスづくりにかかわった
行政職員にとって「都市を計画する」
という仕事とはなにか、その原点に立
ち戻る機会となりました。皆さんが口
をそろえて「本ができて終わりじゃな
い、ここから始まり」と言っていた
のが印象的でした。これから唐津のま
ちづくりがどう変わっていくか、その
変化に今後も注目していきたいと思
います。

（インタビュー・まとめ／百武ひろ子）

自然と対話しながら働く人びとの姿は美しい。
海産物や農産物を売る、米や野菜を作る、山を守る、
唐津焼作り、牛の飼育、イカ釣り漁業、おこし作り、
どれも唐津にはなくてはならない働く人びとの風景。



編集室の7日間

2010年8月16日、市役所3階の大会議室に、27人が集合し、編集室の活動が始まった。唐津をバスで巡り、船で海上から眺め、たくさんの唐津の人たちにインタビュースてまわった。唐津には、歴史も、山も海も、町の暮らしも、活き活きと息づいていることを知って、みんなの心は、わきたった。20年後の唐津への思いを込めた7日間をふりかえる。

1日目 8/16 Mon. 開講式

市長から、集まった27名に特命スタッフ証が渡され、編集室が開かれた。最初のコミュニケーションゲームでは、身体で「唐津」のことを表現したり、似顔絵を描いたり、みんなは意表をつかれてとまどった。けれど、互いのポーズや似顔絵を見て、思わず笑いがこぼれた。初日は、編集の講義で締めくくられた。



2日目 8/17 Tue. 唐津めぐり

バス2台に分乗し、唐津を見学してまわった。市役所を出発し、唐津港、呼子、名護屋城跡、蕨野の棚田、厳木の道の駅、七山の鳴神の庄をめぐり、最終地点の鏡山まで、走行距離はおおよそ170キロ。見学は市の職員が案内役になり、車中や見学先で、地域の特性や歴史、市の計画について解説を行った。



3日目 8/18 Wed. 海上視察

海上保安庁の船に乗り、港湾施設、火力発電所、絶壁の続く海岸線、七ツ釜を巡った。海から見る景色は、変化に富んでいた。沖からふりかえると、虹の松原が広がっていた。見学の最後は旧唐津銀行、再開発ビルなどまちなかを見た。午後は、唐津市の都市計画マスタープランについて、講義を受けた。



4日目 8/19 Thu. 編集会議

チーム作業が始まった。一人ひとりが興味のあるテーマを選び、5つのチームをつくった。地図や参考図書を広げ、過去の新聞記事を読みながら、自分なりの提案を書くために、知りたいことや取材したい人について意見を出し合った。午後はさっそく、市の担当職員に対してインタビューを行った。



5日目 8/20 Fri. 取材

取材に専念した一日だった。チームごとに、それぞれの取材先へ車を走らせた。旧高取邸、呼子の漁業者、棚田の農家、海辺のレストラン、離島の診療所と取材先はさまざま、数十件にもおよんだ。取材先では、いずれもあたたかく迎えられ、みんなは真摯に生活する人びとの話に聞き入った。



6日目 8/21 Sat. 執筆

取材したことをもとに、執筆を開始した。自分が見つけた伝えたいことや、未来の唐津への提案について、一人ひとりが真剣に考えた。文章を書くのは簡単ではなかったけれど、チームリーダーや市の人と、あるいはチームで話すうちに、考えが整理され、原稿も進んだ。納得のいくまで、何度も書き直した。



7日目 8/22 Sun. 発表

7日間の成果の発表時間が迫る中、ぎりぎりまで、原稿に手を入れるチームもあった。そんな中での「サプライズ!」差し入れの唐津パーガーは、特別においしかった。午後は、ひとりずつが、自分の言葉で提案を発表した。市長もかけつけた。やり遂げた27人の笑顔がすがすがしかった。



特命スタッフ紹介

夏休み前、プロジェクトに参加する市内中高生を緊急募集。
そして、市内6つの中学校から22名、2つの高校から5名の応募があった。
総勢27名の市長特命スタッフが、5つのグループに分かれて活動した。

D 班 ●海のまち



山下未裕
(市立第五中学校 2 年)



山本利海
(市立第五中学校 2 年)



吉村早織
(市立第五中学校 2 年)



栗山友里
(市立佐志中学校 3 年)



古川直希
(県立唐津南高校 1 年)

E 班 ●山里



宇治川深雪
(市立第一中学校 2 年)



本庄望
(市立第一中学校 2 年)



脇山咲
(市立第五中学校 2 年)



吉岡美湖
(市立佐志中学校 3 年)



吉岡和起
(県立唐津南高校 1 年)



山口麗菜
(県立唐津工業高校 1 年)



第 1 日目の開校式。市長と卯月早大チームを囲んで

A 班 ●まちなか



宮崎研史郎
(市立第一中学校 2 年)



森田漠
(市立第一中学校 2 年)



福井彩乃
(市立第五中学校 2 年)



松本七海
(市立第五中学校 2 年)



山口舞
(市立佐志中学校 3 年)

B 班 ●みなと



國分紗也加
(市立第一中学校 2 年)



佐藤史菜
(市立第一中学校 2 年)



谷口真彩
(市立第一中学校 2 年)



甲斐千裕
(市立第五中学校 2 年)



田元碧樹
(市立相知中学校 3 年)

C 班 ●虹の松原



森本佳樹
(市立鏡中学校 3 年)



小野尾優士
(市立西唐津中学校 3 年)



草場勇太
(市立西唐津中学校 3 年)



野崎雷太
(市立西唐津中学校 3 年)



橋本大志
(県立唐津工業高校 2 年)



新開秀貴
(県立唐津南高校 3 年)

都市マスを中高生が「市民語」に翻訳

2010年6月坂井唐津市長から、「唐津市都市計画マスタープランができたが、理解するには大変難しいので、市民にわかりやすくするために相談にのってほしい」という依頼があった。送られてきた唐津市都市計画マスタープラン素案は、A4で約300頁という膨大な量で、専門用語もちりばめられていて、たしかに市民にとってはやさしい計画書ではない。しかし、これは唐津市だけの問題でなく、日本全国の都市計画マスタープランが、ほぼ同様の課題を抱えている。むしろ、坂井市長がそれができるだけ市民に読んでほしいと思ったことこそが、きわめて重要である。

そこで私は、「唐津市都市計画マスタープラン市民語翻訳プロジェクト」という提案をした。実はこれまで都市計画の仕事にたずさわる中で、「行政語」と「市民語」という2つの言語があると感じていた。例えば行政が「市民参加を行う」という場合、「市民説明会を実施する」という程度の意味しかもないが、市民が「市民参加を行う」と聞いた場合、「市民の発言によつては内容が変更される」と解釈する場合が多い。これはあくまでも「市民参加」という同じ言葉が行政と市民によつてまったく解釈が異なるという事例であるが、このような解釈の大きな違いが重なる、行政と市民のコミュニケーションは

まったく不可能となる。まさに行政語と市民語の違いは、日本語と英語の違いに匹敵すると言わざるを得ない。

ではどのように「行政語」で書かれた都市計画マスタープランを「市民語」に翻訳するかということであるが、今回はそれを唐津に住む中学生と高校生にお願いした。本来翻訳するには、両方の言語をよく理解できる通訳が必要であるが、今回はあえて中学生、高校生に行政語を学習してもらう時間をとることによつて、市民語への翻訳を試みようとした。

中高生が考えた「市民版都市計画」

私がこのような提案をしたきっかけは、中学2年生の女子ふたりが翻訳した『子どもによる子どものための、子どもの権利条約』（小学館1995年刊）を読んだことが大きい。この本は、実は「子どもの権利条約翻訳・創作コンテスト」で最優秀賞に選ばれた作品である。日本語で書かれているが意味が難解な条約の文章を、当事者である子どもにも理解できるように身近な事例を引きながら、やさしくわかりやすく意識したこの本に私は感動した。この翻訳本は、原書を超えたすぐれた本であり、私はこれに近い翻訳本をつくらうと提案したところ、坂井市長もおおいに賛同してくれて、このプロジェクトがスタートした。

7月にプログラムが固まり、8月実施という極めて厳しい日程であったが、私たちの企画に対する唐津市職員の方々の周到な準備と

対応によつて、1週間のプロジェクトは予想をはるかに越える成果をあげることができた。正直に言えば、中学生、高校生がどれだけのこのような作業を楽しくやってくれるか若干の不安があったが、結果から見れば27人の生徒たちは、多いに楽しんでくれたと思う。

坂井市長の一言から始まったこのプロジェクト、そしてその成果としての本書は、日本における「行政中心の都市計画」に対して、都市計画マスタープランの目標年次を考えれば、当事者である中学生と高校生が自ら考えた「市民版都市計画」ではないかと思う。

中高生の提案を事業化してほしい

現在の日本の都市や社会は閉塞的な状況であり、特に唐津のような地方都市の将来ビジョンはきわめて描きにくい。しかしこのような状況をつくったのは大人の責任であり、また次の世代に向けて夢と希望を与えるのも私たち大人の責任と義務である。本来、将来の夢を示すべき都市計画マスタープランが、単なる絵に描いた餅にならないようにするためには、中学生と高校生の参加は意義があったと思う。今後、彼らの提案企画が事業化されるように職員の方々には望みたいし、これをきっかけに都市計画分野だけでなく、行政のすべての分野において中学生や高校生の参加を、形式的ではなく実質的に進めてほしいと思う。

子どもたちがまちづくりの提案を行い、子ども代表の賛否によつては、行政がその提案を実施しなければいけないという仕組みの「ミュンヘン子どもフォーラム」を、唐津市で実施できないだろうか。今回の体験で、中

学生と高校生は大人が思っている以上にしっかりとした考え方をもっているし、当然ながら大人が失ってしまった豊かな感性をもっていることが実証された。地域をフィールドにした実践的な学習はすべての教科の基礎であり、また応用でもある。唐津市民としてのシチズンシップを育むことを通じてこそ、市民が誇りに思う唐津市を豊かで美しくすることができると信じている。

早稲田大学教授 卯月盛夫



編集—— Teens KARATSU 2030 特命スタッフ 27 名
早稲田大学卯月研究室 唐津プロジェクトチーム
卯月盛夫（早稲田大学教授） 百武ひろ子（早稲田大学講師）
奥村 玄（GEN プランニング） 朝比奈ゆり（ワークショッププランナー）
山本幸恵（ハーツ環境デザイン） 田中悠充（oToMo）
入井 徹（早稲田大学助手）

＊

松井晴子（松井編集室） 西山麻夕美（フリー編集者）

編集協力—唐津市役所

竹内克志 宮崎吉輝 中江 勉 隅田憲宏 鋤野友香
木本 聖 阿蘇清人 柴田靖市 平野 舞 川添玲花
山下正美 八島大三

＊

藤岡継美（からつ大学交流連携センター）
福満孝博（玉野総合コンサルタント）

AD・本文デザイン／丹羽朋子

表紙・イメージマップイラスト／河合睦子

10代が描く唐津のみらい

Teens KARATSU Project 2030

（唐津市都市計画マスタープラン副読本）

2010年12月

発行——佐賀県唐津市建設部都市計画課

〒847-8511 佐賀県唐津市西城内1-1

☎ 0955-72-9135 FAX0955-72-9179

E-mail toshi-keikaku@city.karatsu.lg.jp

印刷・製本／馬場印刷所

佐賀県唐津市西唐津1丁目6136の3

☎ 0955-72-2563 FAX0955-72-2578

